

# 時間の経過は経験可能か

山名 諒

## 序

時間経過が実在すると主張するA理論の支持者の多くはその主要な論拠を経験に求めてきた。彼らによれば、私たちの経験は時間が経過することを明白な仕方で教えてくれる。サイモン・ブロッサーは *Experiencing Time* (以下ET) の第二章においてこの考えに反対する二つの論証、検出器論証 (detector argument) とマルチ検出器論証 (multi-detector argument) を提示している。前者は経験がA理論を支持することはないという論証であり、後者は時間経過がそもそも経験不可能であるという論証である。本稿では「物理的」という語の解釈に注目しつつ、二つの論証の妥当性を批判的に吟味する。最終的に本稿はブロッサーの論証は成功していないと結論づけるが、論証の検討を通してA理論が自身の根拠を経験に求めるために採用すべき時間経過の描像が明示化される。

第一節では本稿の背景的文脈としてA理論とB理論の論争状況を概観する。第二節では検出器論証を、第三節ではマルチ検出器論証をそれぞれ検討する。

## 第一節

現代の分析的時間論はA理論とB理論の対立によって形成されている<sup>1)</sup>。A理論によれば、「過去」「現在」「未来」といった時制表現は「ここ」や「そこ」といった空間的指標詞とは異なり客観的な区分を表している。それに対してB理論は時制的区分が客観的であることを否定する。B理論によれば客観的に実在するのは「より前」「より後」という前後関係であり、「現在」は発話時点を、「過去」は発話時点よりも前の時点を、「未来」は発話時点よりも後の時点をそれぞれ指す指標詞にすぎない。時制区分の客観性をめぐるこの対立は時間経過の実在に関する対立と重ねられる。A理論はどの

時点が現在であるかという客観的な事実が変化していくことで時間が経過すると主張するのに対して、B理論は前後関係という永久不変に成り立つ無時制的事実のみを認めるため時間経過の実在を否定する。この点をもってA理論とB理論はそれぞれ動的時間理論 (dynamic theory of time)、静的時間理論 (static theory of time) とも呼ばれる。

A理論とB理論にもそれぞれバリエーションが存在する。A理論はしばしばその存在論の違いに応じて以下の代表的な三つのタイプに分類される。現在主義は過去と未来の対象は存在せず、現在の対象だけが存在するという立場である。成長ブロック説によれば過去と現在は存在するが未来は存在せず、宇宙の先端（現在）が過去から未来方向へと移動するにつれて次々と実在の総量が増加していく。動くスポーツライト説によれば過去と現在と未来の対象は等しく存在しているものの、「現在性」という性質をもつ唯一の時点があり、ほかの諸時点は「過去性」「未来性」および「二時間後性」のように現在からの時間的な距離と向きに応じて様々に異なる性質をもつ（こうした性質はしばしば「A性質」と呼ばれる）。そして「現在性」というA性質は、諸時点を次々と照らし出すスポーツライトのように、時間軸に沿って絶えず動き続ける。B理論の側にも多くのバリエーションが存在する。時間次元と空間次元を根本的に異なるものと考えるか、それともそうした根本的区分のない四次元時空があると考えるべきか。前後関係は因果の向きや熱力学的非対称性といった他のものに還元されるのか、それとも還元不可能でプリミティブなもの

なのか。こうした論点に応じて様々なバージョンのB理論が成立する。プロッサーと同様に、以下で「A理論」「B理論」という語を用いるときには特定の立場を指すのではなく、さまざまなバージョンを含む包括的な仕方を用いることにする。A理論は私たちの日常的な時間理解を反映しているように思われる。明日予約している歯の手術を怖がったり、来週末に約束しているデートを楽しみにしたりするなど、私たちは未来の出来事に対して特有の態度を向けている。なぜ「未来」という身分をもつ出来事に対してそうした態度を向けるのかと聞かれたときに私たちが答えとして挙げるのは、自分のいるこの時点よりも後であるという不変の前後関係ではなく、まさにその未来の出来事がこれから現在になるという動的な変化だろう。この「なる」という動的な側面は私たちの経験にも色濃く、強烈な仕方で見えているように見える。目の前を通り過ぎるバイクを見るとときや、スピーカーから流れてくるメロディーを聞くとときの経験を考えてみればよい。そうした経験においては、諸時点における状態の差異だけでなくある状態から別の状態に「なる」という動的な要素——少なくともそう呼びたくなる何か——が感じられるだろう。

実際、A理論を支持する論者の多くはその主要な論拠を経験に求めてきた。いくつかの代表的な例を挙げよう。

時間が経過しているという私たちの感覚は、客観的時間の実際のあり方に関する事実のおよそ受動的な経験なのである。時間が経過するという事実は私たちが独立に

成立している。(Norton 2010: 24)

私たちは「生成 (becoming)」の感覚を（少なくともある点では）それを規定している物理的条件への真正な心的洞察であると思わなければならぬ。(Edgington 1928: 89)

絶え間のない時間の流れほど、一貫して私たちに直接与えられているように思われる経験はないだろう。(Schlesinger 1991: 427)

経験に訴えてA理論を支持する議論に対してプロッサーは次のような疑念を表明している。

A理論とB理論の対立は形而上学における対立であるにもかかわらず、論争の片方の側は経験の本性に動機づけられており、それゆえ経験的 [empirical] 根拠に基づいて自らの立場を主張しようとしている。多くの哲学者は概念的問題と経験的問題の間にはシャープな境界があるという可能性に懐疑的になつてはいるものの、ただ見る（あるいは、ただ経験する）だけで形而上学的論争に決着がつくというのはきわめて奇妙な話である。そのようにして論争に決着がつけられるような他の形而上学的論争はなかなか思いつかない。(ET: 23, □内は筆者による補注)

A理論の支持者は経験によって論争の「決着がつく」という強い主張をする必要はないかもしれないが、それでも彼の疑念は真剣に受け取られるべきだ。時間経過が実在するか否かは形而上学的論争であり、特定の種類の物理的出来事の予測や説明に関するものではない。通常の科学的仮説を支持する実験や証拠があるのと同じような仕方では、時間経過の実在を支持する物理的な証拠や実験があるとはA理論の支持者でさえ思わないはずだ。では、心的な証拠はどうしてありうるのか。私たちの経験をA理論の証拠とみなすことを保証する、時間経過と心を結ぶ特別な関係などありえるのだろうか。次節以降で紹介するプロッサーの論証への応答を通してこうした嫌疑を払しょくすることはA理論の支持者にとって喫緊の課題となるだろう。

## 第二節

プロッサーはET第二章で経験をA理論の根拠とみなす主張に反論する二つの論証を提示している。その一つは検出器論証で、もう一つがマルチ検出器論証である。前者は経験がB理論に対してA理論を支持する (favor) ことはありえないという論証であり、後者はそもそも時間経過を経験するのは不可能だという論証である。後に見るように、A理論に対する決定的な反論となるよう意図されているのは検出器論証ではなくマルチ検出器論証である。またプロッサーは「マルチ検出器論証は検出器論証の結論を前提としない」(Prosser 2018: 332) と述べ、両者を独立の論証としてみなしている。

本節では検出器論証を検討する。

プロッサーは時間経過を検出する物理的装置をつくることは可能かという問いから議論を始める。時間経過を検出すると点灯するようなライトがついた装置を考えよう。装置の詳細はどうでもよく、重要なのは時間が経過しているかどうかを教えるアウトプットを産み出すということだ。そのような装置があればA理論が真であるかB理論が真であるかが判明するだろう。そのような物理的装置はありえないとプロッサーは主張する。その論証は簡潔である。A理論とB理論の論争は時間の形而上学的本性をめぐるものであるから、どんな物理的出来事、すなわち「物理学の語彙だけを用いて記述される出来事」(E1:34) が起きるかに関する予測は一致している。したがって、そのライトの点灯に関して二つの理論の予測が一致しないような検出器、すなわち時間経過を検出する装置は存在しない。

プロッサーはこの論証に対して予想される以下の反論を挙げている。ライトが点灯するかについてA理論とB理論が同じ予測をするとしても、ライトの点灯の説明はそれぞれ異なる理論に埋め込まれているだろう。それゆえA理論の支持者は次のように主張しうる。検出器のふるまいを説明する際に持ち出される包括的理論(A理論)には時間経過が含まれているので時間経過の検出器は可能である、と。プロッサーは、論争状況を誤解しているとしてこの仮定反論を退ける。彼によれば、実在の包括的理論としてのA理論とB理論は「物理法則の数学的構造という形で現れる共通のフラグメント」

(*ibid.*) を共有しており、ライトが点灯するかどうかの予測にはこの共通のフラグメントで十分である。「しかし二つの競合理論のどちらが真であるかを実験によって決定する——これはまさに検出器に期待されていることだ——ためには一方の理論だけになされる予測を見つける必要があるのだ」(*ibid.*)。

時間経過が実在しないという仮説を支持する物理的な装置は存在しないということは、A理論の支持者を含め、多くの人の賛同を得られるだろう。しかしこの事実は十分に評価されていないとプロッサーは考える。プロッサーによれば、この事実とともに、現代の心の哲学において常識となっている付随性テーゼを受け入れる限り、経験がA理論を支持することとはありえないということが導かれる。付随性テーゼは、どんな二つの可能な状況についても物理的特性が同じであれば心的特性も同じでなければならないというものである。チャーマーズ(Chalmers 1996)のように、心的なものの物理的なものへの付随は論理的ではなく法則的(nomological)であり、心的出来事と物理的出来事を結び付ける偶然的な自然法則に依存していると主張する論者もいるが、検出器論証にとって付随が論理的であるは必要ない。「検出器論証にとって必要なのは、少なくともそれぞれの個人の心的生に関して法則的な心的・物理的付随が成立することだけである」(E1:36)。先に見たように、A理論とB理論は物理的出来事の予測に関してすべて一致しているのだった。そして二つの理論は物理法則だけでなく、心的なものと物理的なもの

の相関に関する法則も共有しているだろう<sup>(2)</sup>。これらのことから、A理論とB理論は心的出来事の予測についても一致することが導かれる。したがって時間経過の实在を支持する経験は存在しない<sup>(3)</sup>。

検出器論証に関して私が取り上げたい論点は、付随性テーゼに登場する「物理的 (physical)」という語をいかに解釈するかということである。付随性テーゼに登場する「物理的」は「心的」という語との対比で用いられている。それに対してA理論とB理論が「物理的」事実について一致しているといわれるときには「形而上学的」という語との対比で用いられており、そのことが意味しているのは物理学の語彙を用いて記述される限りでの事実について両理論は同意しているということだ。この二種類の対比に登場する「物理的」という語を同一視してよいということはまったく自明ではない。A理論が論じているのは物理学で測定の対象および理論内の変数として扱われているのと同じ時間であり、それとは別に存在する非・物理的な「形而上学的時間」なるものが想定されているわけではない。二種類の対比に登場する「物理的」という語を同一視して、A理論とB理論の共有部分、すなわち「物理法則の数学的構造」(ET:34)に意識は付随すると主張することもできるが、その主張は心の哲学において広く受け入れられている付随性テーゼとは別ものだろう。付随性テーゼを前提に据えるだけでは、A理論とB理論の間で心的出来事についての予測が異なるという可能性を否定するのに十分であり、検出器論証の結論は他の仕方では正当化される必要

がある。

ただし、プロッサーはA理論とB理論では時間の形而上学的本性が異なることを根拠に検出器論証に反論する可能性を無視しているわけではない。検出器論証と類似したプライス (Price 1996) による論証に対してモードリン (Maudlin 2002) が提出した反論を評して次のように述べている。

モードリン流の応答は、もし実際に私たちが動的なA理論の宇宙に住んでいるのだとすれば、現実世界と同型の非・動的なB理論的ブロック宇宙には現実の意識経験と単に同型にすぎない非・心的な種類の出来事ではなく、真正な (genuine) 意識経験が含まれていると想定する理由は存在しない、というものだろう。[……] しかし当然、B理論の支持者は意識経験が存在しうるのはA理論が真であるときに限るということを認めない。むしろB理論の支持者は現実世界が「ブロック」宇宙であり、そしてそこには意識経験が存在すると主張する。それが正しい場合、私たちの経験はB理論が真であったとしても現実と同じであるだろう。A理論の支持者とB理論の支持者はお互いに論点を先取りしている。つまり、それぞれの理論の支持者は、自らの理論が真であるという想定のもとで経験は実際とまったく同じであろうと主張しているのである。(ET:40, 傍点は原文)

プロッサーが指摘するように、もしA理論の支持者が、B理

論的宇宙はその時間の形而上学的本性に関して現実世界と根本的に異なっているので私たちが実際にしている意識経験と同じ種類のものはそこに存在しないだろうと推論するならば、B理論に対して論点を先取りすることになる。しかし他方で「A理論が真であるという想定のもとでもB理論が真であるという想定のもとでも経験は実際とまったく同じだろう」(ibid.)というプロッサーの見解も正当化されていない。A理論およびB理論がそれぞれ真である場合に意識経験は私たちが実際にしているものと同じであるかという問いは付随性テーゼの管轄外である。時間の形而上学的本性と私たちの心の関係について具体的な説明を与えることなしにその問いに答えることはできないはずだ。この問いには本稿の最後で立ち返ることになる。

### 第三節

プロッサーは自身の検出器論証が決定的な反論ではないと認める。A理論が真であろうとB理論が真であろうと経験は実際とまったく同じであり、経験はA理論を支持しないということを検出器論証は示すものであった。だが、A理論の支持者には次のように答える道が残されている。たとえ経験がB理論と整合的であるとしても、そのことは私たちが時間経過を検出できないということを意味しない。それはちょうど私たちの経験が懐疑論的仮説と整合的であるからといって、心が外界の特徴を検出することは不可能でないのと同じである。私は水槽の中で培養されている脳であり、私の経験はす

べてコンピュータによる脳への刺激の産物にすぎないという懐疑論的仮説について考えよう。もし私が水槽の中の脳であるならば私の検出装置は誤作動しており、外界の特徴は検出されていない。しかし私が水槽の中の脳ではない場合、つまり検出装置が適切に作動している場合には、外界の特徴が実際に検出されているはずだ。B理論の場合も同様である。経験がA理論だけでなくB理論とも整合するということが意味しているのは、もしB理論が正しければ実際の世界は経験とまったく異なるあり方をしているということにすぎず、そのことはA理論が真であるときに時間経過が経験(検出)されるということと矛盾しない。そして私たちは懐疑論的仮説を経験の説明として出来の悪いものとみなし、経験を顔面通り受けているのだから、このケースでも同じようにすべきだ<sup>(4)</sup>。いいかえれば、A理論が正しく、時間経過が実際に経験されているという事実によって私たちの経験は説明されるべきである(Eliezer)。

プロッサーはこのような仕方ではA理論を擁護する路線も上手いかないと主張する。彼の考えによれば、仮にA理論が正しく時間経過が実在するとしても、時間経過が経験の対象になることはありえない。したがって時間経過の実在によって私たちの経験が説明されることもない。そのことを示すためにプロッサーはマルチ検出器論証を提出する。

マルチ検出器はそれぞれ異なる現象を検出する複数のライトがついている装置のことであり、人間の心の単純化されたモデルとしての役割を果たす。私たちは常に多くの異なる現

象を経験しており、経験されるそれぞれの現象に応じて異なる経験の要素がある。もし時間が経過するように見えたとしたら、それが正しく判断できるとすれば、それは経験のある特定の要素のおかげであるはずだ。付随性テーゼをここでも前提すると、時間経過は経験可能かという問いは、複数のライトの一つが時間経過に対応しているようなマルチ検出器は存在するかという問いへと翻訳される。

検出器のある特定のライト $l$ の点灯が特定の特徴 $f$ の検出であるための条件とはなんだろうか。知覚の哲学の文献に基づき、プロッサーは以下の二つの条件を挙げている (ET:43)。

条件1…ライト $l$ の点灯は $f$ の例化によって引き起こされておき、 $l$ の点灯に至る因果メカニズムによつて他のライトが点灯されることはない。

条件2…ライト $l$ の点灯は $f$ の出現に反事実的に依存しており、他のライトはそうではない (5)。

たとえば周囲の温度が25℃以上であることを検出するライト5がついたマルチ検出器を考えよう。プロッサーが挙げている検出の条件を満たすには次のことが必要である。第一に、周囲の温度を感じする因果メカニズムが検出器に存在し、そのおかげで25℃以上になるとライト5は点灯する。第二に、(実際には検出器が常に25℃以上の部屋に置かれていたとしても) もし周囲の温度が25℃を下回っていたらばライト5は点灯しなかっただろう。そして最後に、マルチ検出器にはラ

イト5以外にも複数のライトがついており、ライトはそれぞれ異なる現象と上のような因果関係および反事実的依存関係にある。

時間経過について上の条件を満たす検出器上のライト $l$ はありえるだろうか。条件1についていえば、時間経過から他のライトではなくライト $l$ にだけ伸びる因果連鎖があるようには思われない。条件2についても同様である。他のどんなライトでもなくライト $l$ だけが時間経過と反事実的に依存しているということはありそうにない。時間経過が実在しなければライト $l$ や検出器が組織されなかっただろうと、あるいは前節で見たモードリン流の応答のように、そもそも「意識経験」なるものが成立しなかっただろうと仮にいったとしても、それはすべてのライトおよび経験の要素に関して成り立つことであり、特定のライトおよび特定の経験の要素を選び出すことはできない。

マルチ検出器論証の要点を確認しよう。プロッサーによれば、マルチ検出器による特徴の検出と同様、どのような現象であろうとそれが経験されるためには、経験の一つの要素と何らかの関係にあり、経験の他の要素とはその同じ関係にはないことが必要である。しかし時間経過だけを検出するライトがありえないのと同じように、経験の他の要素ではなく、ある特定の一つの要素を時間経過の経験にするような関係は存在しない。「時間経過は特定の心的状態に選択的な影響を与えたり、連結したりするような現象ではないため、経験の対象でありうる種類の現象ではない」 (ET:46)。

マルチ検出器がはたして人間の心の適切なモデルと呼べるかという論点について直接争う余地もあると思うが、本稿ではむしろマルチ検出器論証の背後にある時間経過についての描像に目を向けたい。あらかじめ述べておくと、この論証がA理論に対する反論として有効に働きうるのは、時間経過についてのある特定の描像を前提とする限りにおいてではないかと私は疑っている。その描像とは、時間経過を物体の性質変化や運動から区別される別個の現象として捉えるものである。この描像は、時間軸上を〈今〉が動いていくという、素朴な時間イメージにも見られる。時間軸上の〈今〉の動きが検出器のふるまいに因果的な影響を与えているとすれば、物体のふるまいについての法則や因果的説明に時間の外部にある〈今〉という特殊な実体からの作用を含める必要があるが、これは受け入れがたい帰結だ。たとえ時間経過が時間の内で生じる現象であったとしてもやはり問題が生じる。空間全体に渡る現象であるところの時間経過がマルチ検出器に「選択的な影響を与える」、つまり他ではなくある特定のライトの点灯を引き起こすとは思われないからだ。

時間経過を物体の運動や性質変化とは区別される別個の現象として捉える描像に立つとき、マルチ検出器論証はきわめて説得的である。だが、この描像はそもそも適切だろうか。運動や性質変化それ自体が時間を前提にするため、時間軸上の〈今〉の運動や諸時点が例化するA性質の変化として時間経過を理解すれば無限に時間の高階化を招いてしまうということはマクタガート (McTaggart 1908) やブロード (Broad

1923) によって指摘されてきたことである。さらに「時間が経過する (time passes)」や「〈今〉が動く」といったメタファーを文字通り受け入れるならば、スマート (Smart 1949) らによる有名な批判で知られている通り、時間はどのくらいのはやさで経過するかという、有意味な解答を与えることが困難な問いに直面する。こうした描像は奇妙な事態を引き起こすだけではない。動く〈今〉やA性質の変化というアイデアは空間には見られない時間特有の動性を表現する意図のもとで持ち出されているにもかかわらず、物の運動や性質変化のようなそれ自身時間を前提とする現象とのアナロジーに訴えてしまっている。それ自身が時間を前提とする現象を指定することによって時間に動性を与えようとする試みは倒錯的だといわざるを得ない。こうした理由から、時間経過を運動や変化と並ぶ時間内の現象とする描像はA理論の支持者にとっても受け入れがたいものである。

A理論のなかで最も有望視されている現在主義は、現在の対象だけが存在するという立場であり、動く〈今〉やA性質の存在にはコミットしない。それゆえ多くの現在主義者は「時間が経過する」というフレーズを文字通り受け取ることを拒否している。時間経過のはやさをめぐる問題に応答する形でタラントは次のように述べている。

現在主義者の一人として、私は「時間」あるいは「時間経過 (temporal passage)」と呼ばれる物の存在を信じていない。ただし「時間の实在性」によって、物が変化す

るということ、そして物の変化を通して新たな物が存在し始めるということ以上の何も意味しないならば、私は時間の実在性を信じている。(Tallant 2010: 139)

タラントによれば、時間が経過するとは、物がある特定のはやさで変化すること以上の何ものでもない。佐金(2013)も現在主義を擁護する論文において、時間経過は物の性質変化あるいは物の持続にはかならないと考えることで、時間のはやさをめぐる問題に応答している。時間経過を運動や性質変化と並ぶ別個の時間的現象として捉える描像を拒否するためには必ず現在主義を採用しなければならないわけではないだろう。それでも現在主義がその描像からもっとも遠い位置にあることは間違いないため、ここでは現在主義をベースにして時間経過の暫定的な定式化を与えよう。ただし、時間経過は物の変化以上の何ものでもないとしても、ひとつふたつと数えられる個々の物の変化と同一するわけにはいかない。それゆえ局所的な物の変化と区別して時間経過を次のように定式化する。すなわち、時間経過は現在にある物の変化の総体である。

時間経過についてこうした見解を採用するA理論における運動や性質変化をA運動、A変化と呼ぶことにする。これらがB理論と不整合であることに注意しよう。B理論においてはすべての時点における事態が対等に成立しているため、ある時点における諸事態から別の時点における諸事態への移行というものは生じえない。それに対してA理論によれば、現

在時点における諸事態だけが実際に成立しており、この宇宙においてどのような諸事態が成立しているかは絶えず変化していく。こうしたA理論的宇宙における物の性質変化や運動が「A変化」および「A運動」である。

マルチ検出器論証に戻ろう。もし時間経過が物の変化の総体であるならば、時間経過にだけ反応するようなライトがないという事実はもはや問題にならない。ある特定の局所的な運動や性質変化の検出は時間経過の一部の検出でもあるからだ。もちろん、個々のライトは、ある特定の場所における特定の速度をもったA運動、ある特定の性質から別の特定の性質へのA変化に反応し、それらに共通する側面、すなわち時間的な動性(「なる」)だけを検出する単一のライトが別個に存在するわけではないだろう。しかしそれは、個々の具体的な長さや大きさを検出するライトとは別個に「空間的な広がり」それ自体を検出するようなライトがないのと同様である(6)。

次のような反論が想定される。物体のA運動とライトLの点灯が相関関係にあるとしても両者が反事実的依存関係にあるとは限らない。B理論的宇宙における運動のことをB運動と呼ぼう。ある物体が特定の速度でA運動する代わりにB運動しているB理論的宇宙においても同じようにライトLが点灯するとすれば、ある物体がA運動していなければライトLは点灯しなかっただろうとはいえないはずだからだ。しかしこの反論は成り立たない。反事実的依存関係を調べるときには可能世界を参照するといえ、A理論的宇宙からB理論的

宇宙へと目を移すのはおかしい。A理論が正しい場合、B理論の宇宙は現実世界と時間の根本的なあり方を共有していないのだから、ライトLとA運動の間の反事実的依存関係を評価する際に参照すべき「最近接世界」(Lewis 1979)の候補ではない。もちろん、同じことはB理論の宇宙だけでなくA理論が偽であるような任意の宇宙についていえる。したがって、ある物体の特定の速度をもつA運動とライトLの点灯の間に反事実的依存関係が成り立っていると述べることに問題はない。その物体が別の速度でA運動していたならば、あるいはその物体がA静止していたならば、当のライトLは点灯しなかったらうからだ(7)。

## 結

以上の議論が正しければ、プロッサーの検出器論証とマルチ検出器論証はいずれも十分な成功を収めてはいない。とはいえ、A理論の根拠を経験に求める議論が妥当であると示されたわけではない。A理論の支持者は自身の主張する形而上学的事実と私たちの経験がどのように結びついているのかについての積極的な説明を与える必要があるだろう。そのとき特に問題になるのは、A理論の語彙が物理学の記述には登場しないという点と、A理論の措定する時間経過が(心的であるか物理的であるかを問わず)何らかの対象に対して因果的影響を与えるという点をどのようにして調停しうるかである。これは十全な解答を与えるのに一冊の本を要する巨大な問いであるが、解答の方針を示して本稿を終えよう。

物理学の記述にはA理論の語彙は登場しない。この事実——プロッサーが別の箇所で時間経過を二元論者のクオリアと類比しながら述べるように——「時間経過は宇宙の物理的状态の随伴現象」であり、「物理的世界を形作るうえでいかなる種類の役割も果たさない」(Prosser 2007: 82)ということを帰結するだろうか。時間経過を動く(今)やA性質の変化のように物の運動や性質変化と並ぶ別個の現象として捉える限りその帰結はおよそ不可避であるものの、その描像から離れるならば、物理学の語彙とA理論の語彙の関係を別の仕方でも理解することもできる。時間経過を物の変化の総体として捉える第三節で提示した描像に立つとき、A理論の語彙で指示されるのは物理学の記述する運動や性質変化から区別される別個の形而上学的対象であると考える必要はない。物理学の語彙を用いて運動や変化などの時間的現象に関して記述されるのはその数量化された側面、プロッサーの表現でいえば「数学的構造」(H. 34)であり、その側面について物理学は多くの重要な発見を私たちにもたらしてくれる。しかし——A理論の支持者はこう切り返す——数学的構造それ自体は因果的力能をもたず、因果的力能をもつのはむしろその数学的構造が実現されている基盤としてのA変化やA運動である。この描像は、物理学の語彙で記述される数学的構造や傾向性の背後にある因果基盤としてクオリアを位置付けるラッセルの一元論とある程度類比的に捉えうる(8)。物理学の語彙とA理論の語彙をこうした仕方で重ね合わせるならば、時間の動的特徴(「なる」)は因果関係を通して経験に現れると

考えることで、検出器論証に対して応答する道も開かれるかもしれない。

上で提示したのはA理論の支持者がとりうる解答の方針にすぎず、十全な議論からは程遠い。たとえば、相対性理論をはじめとする物理学の理論が語る時空の数学的構造とA理論の時制区分が上手く対応づけられるかという論点を避けて通ることはできないだろう。とはいえ、時間の形而上学的事実と心がどのような関係にあるのかを詳細に論じることなしに、経験はA理論を支持するという結論も、あるいはその反対に経験はA理論を支持しないという結論も導くことはできない。そのことを示せたのであれば本稿は十分役割を果たしたと思いたい。

#### 参考文献

- Broad, C. D. (1923). *Scientific Thought*. London: Kegan Paul.
- Chalmers, D. (1996). *The Conscious Mind*. Oxford: Oxford University Press. (D・チャーマーズ『意識する心』林一訳、白揚社2001.)
- Chalmers, D. (2013). "Panpsychism and Panprotopsychism". *Amherst Lecture in Philosophy* 8: 1-35.
- Eddington, A. (1928). *The Nature of the Physical World*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, G. (2017). "Explaining away temporal flow". *Inquiry* 61: 315-27.
- Lewis, D. 1979. "Counterfactual Dependence and Time's Arrow". *Notis* 13: 455-76.

Maudlin, T. (2002). "Remarks on the Passing of Time". *Proceedings of the Aristotelian Society* 102: 259-74.

McTaggart, J. (1908). "The Unreality of Time". *Mind* 18: 457-84. (J・マクタガート「時間の非實在性」永井均訳、講談社2017.)

Norton, J. (2010). "Time Really Passes". *Humana Mente* 13: 23-34.

Price, H. (1996). *Time's Arrow and Archimedes' Point*. Oxford: Oxford University Press. (H・プライス『時間の矢の不思議とアルキメデスの目』遠山峻正・久志本克己訳、講談社2001.)

Prosser, S. (2007). "Could We Experience the Passage of Time?". *Ratio*, 21: 75-90.

Prosser, S. (2016). *Experiencing Time*. Oxford: Oxford University Press.

Prosser, S. (2018), "Replies to Deng, Lee, and Skow". *Inquiry* 61: 328-50.

Schlesinger, G. (1991). "E Pur Si Muove". *Philosophical Quarterly* 41: 427-41.

Smart, J. J. C. (1949). "River of Time". *Mind* 58: 483-94.

Tallant, J. (2010). "A Sketch of a Presentist Theory of Passage". *Erkenntnis* 73: 133-40.

佐金武 (2013). 「時間の経過」科学基礎論研究 第40巻 (2): 1-22.

#### 【註】

(1) 以下の背景的文脈の紹介はET第一章の記述を参考にしてる。

(2) プロロッサーはこのことを明示的に述べていないが、心的出

来事と物理的出来事を結びつける法則を両理論が共有しているということも論証の前提に付け加えるべきだろう。その法則を共有していない場合、物理的出来事の予測に関して一致する二つの理論が付随性テーゼに反することなしに心の出来事に関して異なる予測をすることがありえるからだ。

(3) プロッサーは付随性テーゼを受け入れないタイプの二元論についても考察しているが本稿では扱わない。

(4) 懐疑論的仮説は経験についての出来の悪い説明であるとなぜみなしうるのか。プロッサーはその問いに答えるのは「やっかい (tricky)」だと述べるだけで詳しい説明を与えてはいない (Et: 41)。懐疑論的仮説の方はともかく、B 理論を経験についての出来の悪い説明だとみなす根拠がどこにあるかは比較的容易に推察できる。特別な事情がない限り、ある特徴  $f$  が現前しているように見えるという事実を最も率直な仕方で説明するのは実際に  $f$  が現前しているという事実である。ただし、これは私たちの知覚システムが正常に機能しているという前提のもとでのみいえることであるから、懐疑論的仮説を出来の悪い仮説だとみなしうる根拠とはまた別のものだろう (懐疑論的シナリオはまさに「特別な事情」の一例である)。

(5) 厳密には、あるライト L の点灯が特徴  $f$  の検出であるために、他のどんなライトも  $f$  と因果関係あるいは反事実的依存関係にないということは必要ないだろう。そのようなライトは複数存在していてもかまわない。重要なのは特徴  $f$  が検出器上の複数のライトに対して選択的な影響を与えなければならぬという点である。

(6) リー (Lee 2017) による関連する指摘がある。リーによれば、

プロッサーの論証を受け入れてしまうと、空間的広がりをもちという宇宙の一般的特徴も経験に基づいて知ることとはできないことになってしまう。なぜなら、もし宇宙が空間的広がりをもたなければいかなる経験も成立しなかったはずであり、それゆえ空間的広がりとという一般的特徴によって選び出される単一のライトは存在しないからだ。しかし実際には、特定の大きさや形についての空間的経験に基づいて、空間的広がりとという一般的特徴が実在すると推論できる。つまり少なくともいくつかの一般的特徴についてはたとえプロッサーの挙げる条件を満たさなくとも、それが例化されていることを経験に基づいて知ることができるのである。時間経過が実在するというのも宇宙のそうした一般的特徴の一つとみなすことで A 理論の支持者はマルチ検出器論証に反論可能であるとリーは主張する。リーの主張に私は概ね賛同するが、リーはこの反論の成否が時間経過についてどのような描像を採用するかにかかっているという点を見逃しているように思われる。リーは A 理論の支持者による次のような反論を想定している。すなわち、ある特定の出来事が生じたことに気づき、記憶のなかでそれがますます遠い過去へと退いていくところに注意を向けることによって時間経過の実在が推論される、と。「遠い過去への退き」という表現を文字通りに解釈する限り、この反論は時間経過を物体の運動や性質変化と並ぶ別個の時間的現象として捉える描像に立脚している点で問題含みである (もちろん、この描像を避けるために A 理論は当の表現をいかにパラフレーズすべきかという問題も生じるのだが)。通常の物理的現象とは別個の、しかも高階の時間を要す

るような現象が特定の物理的対象に対していかに影響を与えうるのかを理解するのは困難である。実際、リーの批判に対してプロッサーは、ある特定の出来事が遠い過去へと退いていくことに対して可感的である経験の要素などない」と答えている (Proser 2018: 337)。ただしリー自身は形而上学的語彙で経験を記述するのは適切でないという理由から時間経過が経験不可能であると考えている。リーのこの議論についての検討はまた別の機会に譲る。

(7) ある特定の波長域の電磁波を検出する網膜細胞 R と比較しよう。網膜細胞 R と特定の波長域の電磁波との間の反事実的依存関係を評価するにはそもそも電磁場が存在せず別の理論的対象が存在する可能世界を参照しなければならないと考える人はいないだろう。もちろん、時間経過の存在とは異なり、電磁場の存在を仮定することで（細胞 R の反応を含め）観察可能な物理的出来事に関して多くの予測と説明がなされるという違いがある。しかし物理的出来事に関する予測や説明として持ち出されることが検出および経験の対象となるための条件だという主張は検出器論証の反復にすぎない。他方で、A 理論の支持者も A 理論の語彙が科学理論のなかに登場しないという事実について釈明する必要があるだろう。最後の点については本稿の結論を参照されたい。

(8) ラッセルの一元論についてはたとえば Chalmers 2013 を見よ。